

平成30年度 学校経営計画に対する最終評価報告書

石川県立金沢二水高等学校

重点目標	具体的取組	実現状況の達成度判断基準	集計結果(カッコ内昨年同時期結果)	分析(成果と課題)及び次年度の扱い(改善策等)
1 学習指導： 探究型授業を推進する。アクティブラーニングの手法を効果的に導入して、生徒の自主的な学習態度を養成する。	① 生徒が「予習→授業→復習」の学習サイクルを確立し、主体的に学習に取り組むようにする。	平日の家庭学習時間の平均が3時間以上である生徒の割合が、 A：80%以上 B：70%以上 C：60%以上 D：60%未満	12月 生徒アンケート結果 よく・おおむねあてはまると答えた割合 1年生：35.0% (49.7%) 2年生：45.5% (45.1%) 3年生：93.1% (93.7%) 全体：57.8% (62.8%) 【達成度D】	・前年同期と比較すると全体で5.0%も減少した。2,3年生はほぼ同じ割合であったが、1年生が-14.7%と大きく減少した。今年度前期と比較しても、2年生は-0.9%、3年生は+11.0%であったのに対し、1年生は-10.5%と大きく減少した。例年1年生は前期より後期が減少するが、減少率も例年になく大きい(昨年度1年生-7.1%)。1年生に対して分析と指導を徹底する必要がある。 ・今後は時間の確保だけでなく、家庭学習における質の向上も目指す必要がある。
	② 変化の激しい社会の中で、生徒が将来様々な問題や課題に直面しても対応できる論理的思考力や表現力を身につけるように授業改善を推進する。	「授業を通して思考力が高まった」、「授業を通して表現力が高まった」の問いに対して「あてはまる」と答える生徒の平均が、 A：50%以上 B：40%以上 C：30%以上 D：30%未満	12月 生徒による授業評価結果 「あてはまる」と答えた割合 思考力が高まった：33.8% (33.8%) 表現力が高まった：29.3% (28.3%) 平均：31.6% (31.1%) 【達成度C】	・前年度同期と比較すると0.5%の上昇とほぼ同じである(思考力±0%、表現力+1.0%)。学年別では、1年生31.7%、2年生27.8%、3年生35.4%と3年生が最も高くなっている。 ・本年前期と比較すると全体で1.7%上昇した(思考力+1.2%、表現力+2.2%)。 ・総合的な学習の時間の課題探究や、AL(アクティブラーニング)型授業など、表現する機会が増えてはいるが、生徒としては表現力が高まったとは実感できていないようである。様々な機会を通して表現力を高めていく必要がある。
	③ 授業やあらゆる学校行事の機会を利用して、自分の意見や調べたことを発言・発表できる場と雰囲気をつくり、失敗をおそれずに応答や意見発表ができる生徒の増加を図る。	「授業中に積極的に発言・発表することができる」と答える生徒が、 A：70%以上 B：60%以上 C：50%以上 D：50%未満	12月 生徒アンケート結果 よくあてはまる：12.5% (13.3%) おおむねあてはまる：36.1% (36.6%) 合計：48.6% (49.9%) 【達成度D】	・前年同期と比較すると全体で1.3%減少した。学年別では、1年生44.0%、2年生44.8%、3年生57.0%と3年生が最も高くなっている。 ・本年前期と比較すると全体で0.4%上昇した。これは昨年同期の上昇率(4.1%)より低い。 ・AL型授業や課題探究などで発表する機会は増加しているが、自らの意思で能動的に発言することのできる生徒はまだ少ない。まずは、小グループ内で発表する機会を増やし、能動的・積極的に発言を行うことに慣れる必要がある。
	④ 探究型授業の基盤となる豊かな知識を身につけるために、ビブリオバトル(競技スタイルの書評プレゼン大会)を充実するとともに、多方面から図書を紹介することで、生徒の読書活動を推進する。	図書の貸し出し冊数が、 A：3,000冊以上 B：2,800冊以上 C：2,600冊以上 D：2,400冊以上	1月末時点 図書の貸し出し冊数 2,534冊 (2,491冊) 【達成度D】	・現1月末時点の貸し出し冊数は、昨年度同期の1.7%増であり、5、7月が増加している。その主な理由として、今年度、前期読書週間中に読書する本を生徒独自に選ばせたこと、探究活動の取組や二水版ビブリオバトル(2年のテーマ：知性をつける本)のため読書の機会が増えたこと等が考えられる。 ・今年度のビブリオバトルでは、プレゼン力の伸長のため、各方面と連携しながら、事前学習(読み原稿の推敲、「話し方講座」の聴講)を充実させた。結果、聴き手に理解し興味を持ってもらえるよう内容や話し方を工夫する様子が窺えた。
学校関係者評価委員会の評価	「思考力・表現力がついた、積極的に発言できた」という場面で、教員からの積極的な評価が大切である。学習目標を明確にして教育活動を行ってほしい。家庭学習時間については単に長さだけを問うのではなく、質も含めて考えた方がよいのではない。			
学校関係者評価委員会の評価結果を踏まえた今後の改善策	教科の特性を踏まえて、思考力・表現力については授業中の場面に応じて、生徒に対し具体的に良い点等をあげて評価し、達成感を感じさせる指導を行っていく。探究活動をさらに充実させ、生徒の自主性の育成につなげていきたい。家庭学習時間については、すきま時間の活用など、主体的な学習への指導に取り組んでいきたい。			

重点目標	具体的取組	実現状況の達成度判断基準	集計結果(カッコ内昨年同時期結果)	分析(成果と課題)及び次年度の扱い(改善策等)
2 進学指導： 保護者との連携を深め、高い進路目標を強い意志を持って実現する生徒を育成する。	① 学年集会や講演会、進路説明会を効果的に開催し、併せて各種の情報を提供することによって、より高い志望を掲げ、その志望を貫ける生徒を育てる。	3年生の9月段階で難関大を志望する生徒の割合が、 A：40%以上 B：35%以上 C：30%以上 D：30%未満	9月 3年第2回志望校調査 国立難関10大学志望者数 126名 全体の32.0% (125名 全体の31.4%) 【達成度C】	3年4月の33%から9月32%と、変わらず概ね高い志望を保つことができた。9月以降の志願変更は成績推移による影響が大きいため、次年度はさらに学力向上を目標に指導に取り組んでいきたい。また2年次までの志望者増加も次年度の課題である。
	② 進路検討会や日常の情報交換を通じて、授業や部活動で関係する生徒の成績を把握し、進路志望について助言に努める。	「授業を受け持つ生徒や顧問をしている部の生徒の成績を把握し、進路志望についての助言に努めているか」の問いに対して、「よくあてはまる」または「おおむねあてはまる」と答える教員の割合が、 A：90%以上 B：80%以上 C：70%以上 D：70%未満	12月 教職員アンケート結果 よくあてはまる：31.4% (29.2%) おおむねあてはまる：51.4% (54.4%) 合計：82.8% (83.8%) 【達成度B】	前回(7月)時点に比べ、「よく」「おおむね」を合わせた評価は3.9%上昇した。また「まったく」の数値が0%であることも合わせ、生徒の進路志望についての関わりを深めようという意識の向上が窺えた。次年度も丁寧な情報提供と共有をさらに進めることにより、進路指導に対する教員の意識の向上と、多方面からの指導体制の構築を行っていきたい。
	③ 保護者懇談や保護者対象の進路説明会、生徒への面談をとおして、生徒の進路に関して保護者と緊密な情報交換を行い、信頼関係を築く。	「本校の進路指導や担任からの保護者への情報提供は適切であるか」の問いに対して「よくあてはまる」または「おおむねあてはまる」と答える保護者の割合が、 A：90%以上 B：80%以上 C：70%以上 D：70%未満	12月 保護者アンケート結果 よくあてはまる：19.2% (19.1%) おおむねあてはまる：62.3% (64.3%) 合計：81.5% (83.4%) 【達成度B】	前回(7月)時点に比べ、「よく」「おおむね」を合わせた評価は0.7%の増加で、年間通して80%以上の適切であるという評価を得られた。担任の丁寧な面談や、文理選択の指導や保護者進路説明会、学年通信などとおして情報提供を行ったことが要因であると考えられる。次年度も担任・学年・進路課から保護者に向けて丁寧に情報提供を行うことで、保護者との信頼関係を築いていきたい。
	④ 進路講演会や学年集会、担任による面談等で積極的な啓発活動を実施するとともに、志望校別入試対策を充実させることにより進路実績の向上を図る。	現役での難関大合格者数が、 A：50人以上 B：40人以上 C：30人以上 D：30人未満 (昨年度最終：21人)	現役難関大学合格者数、 18人 (昨年度最終：21人) 【達成度D】	難関大学にはAO受験者を含め、現役受験者57人中18人(昨年度63人中21人)が合格した。合格率も31.6%(昨年度33.3%)と減少した。今年度は現役生から京都大学への合格者が1名でたものの、受験者・合格者ともに減少傾向にある。自分の志望を貫くよう精神面でサポートと、難関大学の入試に対応できる学力の育成が課題である。
学校関係者評価委員会の評価	大学のブランドだけでなく、将来の自分をイメージして、大学で何に取り組むのかという目的意識をしっかりと持って進学していくよう、さらに指導を充実させてほしい。高校は自己決定を行っていく大切な時期であり、生徒に寄り添い、面接等を通してしっかり指導して欲しい。			
学校関係者評価委員会の評価結果を踏まえた今後の改善方針	個別の面談や丁寧な情報提供をすることにより生徒の進路意識の醸成に努めたい。また、担任だけでなく、教科担当・部活動顧問など、生徒に関わる多方面の教員からの指導体制の構築していく。また、進路指導に対する教員の意識向上、共通理解を図り、難関大等へ最後まであきらめず、ねばり強くチャレンジしていく生徒の育成に努力していく。			

重点目標	具体的取組	実現状況の達成度判断基準	集計結果(カッコ内昨年同時期結果)	分析(成果と課題)及び次年度の扱い(改善策等)
3 生徒指導・部活動：人間形成に主眼をおいた生徒指導を行い、進学校にふさわしい部活動を追求する。	① 効率的な部活動による生徒の学習時間の確保や、学習環境の整備に努めるとともに、部員が主体的に活動する指導を工夫し、技能や成績を向上させる。部活動で得た自信を勉学につなげ真の文武両道を目指す。	① 「勉強と部活動の両立ができています」と答える割合が、 A 80%以上 B 70%以上 C 60%以上 D 60%未満 (昨年度最終：73.3%) ② 県高校総体の学校順位が、 A 8位以上 B 10位以上 C 12位以上 D 14位以下 (昨年度最終：9位)	① 12月 生徒アンケート結果 よく・おおむねあてはまると答えた割合 1年：70.9% 2年：65.0% (72.4%) (65.5%) 3年：84.0% 全体：73.3% (80.9%) (72.9%) 【達成度B】 ② 県高校総体の学校順位 男子29位 女子6位 総合14位 (男子9位 女子12位 総合7位) 【達成度D】	① ほぼ例年通りの達成度であった。ただ、3年生に関してはここ数年で最も高い数値となった。この「やり切った」という達成感を今後も大切にしていく。反して、2年生の落ち込みが大きい。後半に退部者が多く出た部もあり、学習面や人間関係でのフォローを学年団とも協力していかねばならない。 ② 今年度は本校の特徴である女子の頑張りが発揮されたが、男子が低迷し10位台にとどまった。また、今年度は部活動の加入率が80%を切ってしまった。部活動を巡る様々な改革や生徒の気質変化等も鑑み、それらに適応した運営を考えていかねばならない。
	② 生徒が挨拶を自ら積極的に行うよう、教職員が一致した指導を行い、生徒の自覚を高める。	「挨拶はしっかりと行っている」と答える生徒が、 A 60%以上 B 40%以上 C 20%以上 D 20%未満 ※本年度質問内容変更	12月 生徒アンケート結果 よくあてはまると答えた割合 1年：34.6% 2年：31.1% (14.9%) (17.7%) 3年：35.6% 全体：33.8% (16.4%) (16.3%) 【達成度C】	質問の仕方が変わったため単純に昨年度と比較はできないが、1/3の生徒はしっかりとやっていると自覚がある。それをさらに育てるため、これらの生徒を中心に、今年度自主的に挨拶運動を続けている生徒会執行部や何よりも教職員が範を示し続けなければならない。
	③ 本校の「いじめ防止基本方針」に基づき、いじめアンケート、個人面談・保護者懇談や学校行事等の取り組みを確実に実施することで、いじめの発生を防ぐ。	「十分取り組んでいる」と「取り組んでいる」と答える教員の割合が、 A 95%以上 B 90%以上 C 75%以上 D 75%未満	12月 教職員アンケート結果 十分取り組んでいる：51.4% (54.2%) 取り組んでいる：47.1% (43.1%) 合計：98.5% (97.3%) 【達成度A】	日頃の目配り・気配りに加え、いじめアンケート、個人面談、保護者懇談、各種講座・研修、ストレス調査、挨拶運動、二水アクト・ライブ、二水祭等々での「いじめ防止基本方針」に則った細かな指導により、今年度も良好な状況を維持できた。この状況に満足せず、来年度も情報の早期把握と共有等に力を注いでいく。
	④ 日頃からの生徒観察をとおして気づいたことを見逃さず、学校全体が連携して、心身の調和を基盤とした生徒の人間形成を図る。	「担任・教育相談室・保健室等と連携し、問題(悩み)等を抱える生徒の早期発見・早期解決に努めているか」の問いに対して「よくあてはまる」「おおむねあてはまる」と答える教員の割合が、 A 90%以上 B 80%以上 C 50%以上 D 50%未満 (昨年度最終：95.8%)	12月 教職員アンケート結果 よくあてはまる：58.6% (51.4%) おおむねあてはまる：35.7% (44.4%) 合計：94.3% (95.8%) 【達成度A】	「よくあてはまる」の割合は7.2ポイント上昇したが、「おおむねあてはまる」が減少したため、昨年度に比べ1.5ポイント減少した。しかしながら、この項目は、職員全員が努めるべき項目であり、100%を目指して生徒の指導に当たっていかねばならないと考えられる。
	⑤ 部顧問や保健体育科等と連携し、生徒自身がけがの予防(熱中症予防含)、傷病時の対応等(AED講習、応急処置等)ができるよう指導を行い、自己管理能力を高める。今年度は特にけがの多い陸上大会前にけがの予防及びけがの手当てについて指導する。	保健室利用のうち外科的利用の件数が昨年度に比べ、 A 10%減少 B 5%減少 C 現状 D 増加	1月末時点 外科的利用件数(4～1月) 423件 (503件) 【達成度A】	今年度は、4月と9月に「けがの予防と応急処置」について、保健委員を対象に保健指導を実施し、クラスで伝達してもらった。また、「熱中症予防」については気温が上がり始める5月に全ての部活動の代表者を対象に保健指導を行い部員に伝達してもらった。負傷して保健室に来室した際には、一人でできる応急手当を指導し自己管理能力のアップに努めた。結果として、外科的利用者数は昨年度より16%減少させることができた。
学校関係者評価委員会の評価	部活動については、効率的な活動を工夫しながら、成果につなげていってほしい。現代社会においては、SNSなどでのトラブルも多発していると聞いているので、マナーの指導も含め適切に利用するよう生徒の意識の醸成をはかってほしい。			
学校関係者評価委員会の評価結果を踏まえた今後の改善策	部活動については、生徒の状況を把握しながら練習を効率的に行い、生徒に達成感をもたせるよう指導していく。部活動加入率の向上については、生徒の気質の変化などに適応しながら運営していくことで、進学校での部活動の適切なあり方を追求していく。			

重点目標	具体的取組	実現状況の達成度判断基準	集計結果(カッコ内昨年同時期結果)	分析(成果と課題)及び次年度の扱い(改善策等)
4 教職員が常に改革意識を持って業務の効率化をはかり、よりよい教育活動を追求する。	会議運営や文書作成のさらなる効率化を行い、また、ICTスキルアップや業務の優先順位付け等を通して、教職員の業務効率化の意識を醸成する。	「生徒と向き合う時間の確保に努めている。」の問いに対して「よくあてはまる」と答える教員の割合が、 A 80%以上 B 60%以上 C 40%以上 D 40%未満 (今年度新規)	12月 教職員アンケート結果 よくあてはまる : 41.4% おおむねあてはまる : 51.4% 合計 : 92.8% 【達成度C】	前回(7月)時点に比べ、「よくあてはまる」と回答した教員がかなり多くなった(+13.2ポイント)。次年度はさらに業務の効率化を意識し、ICTスキルの向上などに積極的に取り組んでいきたい。
学校関係者評価委員会の評価	昨年度に比べ超過勤務は減少しているとのことだが、一般的に言って、教員が担う業務が多いのは事実である。多忙化を改善していくには、やはり教員の意識改革が必要なのではないかと。遅くまで一生懸命仕事をしているのがいい先生だという意識を変えていく必要がある。			
学校関係者評価委員会の評価結果を踏まえた今後の改善方策	多忙化の改善については、県の施策を注視しながら、細かなところでもできることから進めていきたい。業務の効率化・教員の意識改革を小さな事でも少しずつ職員に啓発していくことで、超過勤務の減少をはかり、教員が余裕を持って教育活動を行えるよう模索していきたい。			